

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第28巻第3号 (2020年10月15日)

32回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239

2016年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240

2017～9年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料(カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

28巻第3号 目次

はじめに

ラトゥール研究の途中経過

10月12日 ラトゥール研究のまとめ

崇拜物としての商品・貨幣の仕様書—ラトゥール宛手紙

調査報告 新型コロナ後の世界を読む(第三回)

気候変動に対応できる新しい政治の形成過程

新型コロナ後の知とは——ラトゥールの政治思想に学ぶ——

(『季報唯物論研究』寄稿論文)

はじめに

コロナ禍は収まりそうありません。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。

私は7年20日の拘禁生活を経験しており、その前には、6年間の地下活動がありましたから、13年間くらいの「自粛生活」を強いられてきました。それに比べれば、たったの8ヵ月ですが、ストレスのかかり方はずっとひどいです。これは、自由に生活できることが選べるにも拘らず、自粛しているという中途半端な拘禁状態だからでしょうか。

まず曜日の観念が失われます。拘置所ですと、看守がいつも見回っているし、運動、入浴の日も決まっています、その上に食事も用意してくれます。だから曜日は外部からやってくるのですが、現在だと、新聞やパソコンを見ればわかるのですが、外部から他者によって教えられることはありません。そのせいでしょうか。

そんなことで、本誌の発行も自分で締め切りを決めてはいるのですが、だらだらと伸ばしてしまっています。もっとも今年に限れば世界史的転換点ですので、それを読み切ることが問われていて、たまたま、ラトゥールに魅せられてしまったので、彼のなんとも入り込んだ諸著作を読みとくのに難儀してきた、という事情もあります。彼は現代社会を人類学の方法で解明しようとしているのですが、そのせいで、既成の学問的枠組みを取っ払ったところで論議しており、枠組みの中であればすっきり了解できますが、それがいないところでの陳述は、最初の一読ではほとんど意味不明なのです。

しかし、あと一手で彼を詰めるところまで来ています。そしてその論文の骨子はできているのですが、突然中国政府がデジタル通貨の実験を始めたというニュースが10月12日に流れました。

「10月第2週に、深圳市は総額1000万元（約1億5700万円）のデジタル通貨を抽選で5万人の市民に配布すると発表した。市当局はモバイルの「赤い封筒」を通じて当選金を送る。これは中国でお金を贈る際に使われる赤い封筒をデジタル化したツールで、WeChatのeウォレットで最初に普及した。

デジタル人民元を暗号通貨の一形態と誤解するのは適切ではない。中央銀行が発行・管理し、中国の法定的、物理的な通貨のデジタル版として機能するもので、中央政府は通貨の流通を把握できる。現金が使われなくなりつつある中国において、WeChat PayやAlipayといったサードパーティの決済アプリを補完するものであって、置き換えるものではない。

例えば、中央政府は将来、出先機関に補助金をデジタル人民元で渡すかもしれない。そうすれば汚職などの問題を減らせる可能性がある。

中国は4つの都市でデジタル人民元の試験を始めるが、深圳はそのひとつだ。中国政府は8月に詳細は明かさなかったものの通知を出していた。今回の一般市民へのデジタル人民元の配布は、中央銀行が発行する仮想的な通貨に関する中国初の大規模な公開実験と見られる。

市当局の発表によれば、深圳の200万人近くの市民が抽選に申し込んだという。当選者はデジタル人民元公式アプリ内の赤い封筒で200元（約3100円）を受け取り、このバーチャルマネーを市内3000店以上の小売店で使うことができる。」（ネットより）

私はコロナ禍の直前まで、デジタル経済における信用の役割について調査していました。ラトゥールを詰めるよりもこちらの方に緊急性があることに気づかされたので、こちらの研究に舵を切ります。

あらかじめ観点について簡単に述べておきましょう。中国人民元の紙幣には中国人民銀行と印刷されています。ですから、日本銀行券と一見同じ外観をしています。でも日銀券は信用貨幣ですが、人民元は国家紙幣です。というのも中国人民銀行は「中国の中央銀行であり、國務院指導下の全国組織を統一管理する国家機関」で、資本主義諸国の中央銀行のような民間の株式会社ではないのです。日本も含めた多くの国の中央銀行は民間の株式会社であり、それが発行する通貨は信用貨幣です。国家紙幣を通貨としている国家は少数

でしょう。でもどちらかで巨大な差異があるのです。中国が簡単にデジタル人民元を発行し、実験に踏み切れるのも人民元が国家紙幣だったからです。日本やアメリカもデジタル通貨発行を準備していますが、中国の今回の実験のように政府が直接ばらまくという形はとれないでしょう。銀行券と国家紙幣の違いという問題についての理解が問われます。とりあえず文献の紹介をしておきましょう。

ユースタス・マリズ『民間が所有する中央銀行』（秀麗社、1995年）

宋鴻兵『ロスチャイルド、通貨剥奪の歴史とそのシナリオ』（ランダムハウス講談社、2009年）

タイトルだけで内容が想像できるでしょう。最近はやりの MMT はヘリコプターマネーを構想していて、これは国家紙幣ですが、それは銀行券によって巨大な富を得ている連中によって阻止されるに違いありません。

さて、ラトゥールが、1989年のベルリン壁崩壊で社会主義の崩壊を見て取っただけでなく、同年の地球環境保全のための国際会議の開催に資本主義の崩壊を予測したことをヒントに現代世界を読むとすれば、現在進行している事態は「両階級の共倒れ」ではないかと考えるようになりました。この観点から見れば、新自由主義は労働市場の規制緩和と資本市場で負債経済を跋扈させることで、資本主義の持続可能性を奪っていったことがわかります。ベーシックインカムは彼らにすれば資本を保全するための最後の一手でしょう。両階級が共倒れになりつつある現在人々は何をなすべきか、という問題について議論する必要があります。

さて、今号は、また、ラトゥール特集です。

最初に、「ラトゥール研究の途中経過」と「10月12日 ラトゥール研究のまとめ」を掲載します。次に、ラトゥールのサイトが判明したので、手紙を送りました。「崇拜物としての商品・貨幣の仕様書—ラトゥール宛手紙」がそれです。その次の「調査報告 新型コロナ後の世界を読む（第三回） 気候変動に対応できる新しい政治の形成過程」は、『協同組合運動研究会報』299号（8月31日）に掲載したものです。最後の「新型コロナ後の知とは——ラトゥールの政治思想に学ぶ——」は『季報唯物論研究』次号掲載予定の寄稿論文です。

私はラトゥールの一番いいところは政治思想にあると考えています。両階級の共倒れ、という観点から見ればブルジョアジーにつき従わせられているプロレタリアートを代表している左翼も、人間だけを主体と見做し、自由や民主主義や人権を論じているブルジョアジーの思想的に包摂されて、一緒に共倒れの道を進んでいると見るほかはありません。これを否定できる政治思想がいま求められていて、これは共倒れを拒否する人々が共同して作り上げなければならないものです。

ラトゥール研究の途中経過

私は、ラトゥールは、今年に入ってからで、まだまだ研究途上ですが、『地球に降り立つ』での気候変動に対応する「新たな政治」の提案に同意して、その趣旨の拡散に努めてきました。他方、『虚構の近代』や、『近代の〈物神事実〉崇拜について』などにも手を伸ばしてきたのですが、ずっと底なし沼の感じでした。でもここ二、三日（9月5日ころ）で霧が晴れてきたのです。

私は文化知を提起したときに、関係の解明は思考による分析的抽象では歯が立たず、関係の両極による総合によってお互いに抽象しあっていることを認めるほかはない、と考えていたのですが、ラトゥールも、分析的抽象の誤り（一撃による物神崇拜の解消は関係そのものを壊してしまう）に気付いていて、相互関係を媒介子の働きを通して解明しようとしていたのです。

これはこれで大変な作業です。『社会的なものを組み直す』はその作業の成果ですが、私はこの作業の方法論を、分析的抽象を捨てて、関係の両極がお互いに干渉しあって判断を作り出している、という事態抽象を了解するという文化知の方法を適用すれば、もっとわ

かりやすくなることに気づいたのです。

ラトゥールの ANT では商品が取り上げられていません。これは不思議ですが、たぶん『資本論』以上のことは書けないのでためらっているのでしょう。ゾーン・レーテルという人が『精神労働を肉体労働』で、思考による分析的抽象と商品相互の関係による抽象（事態抽象）との違いを述べていて、ジジエクもこれに言及しているので、ラトゥールも知っているでしょう。

ラトゥールはヘーゲルの弁証法を評価しつつも、それが意識の運動であることを批判しています。そしてマルクスがヘーゲルの弁証法を批判したことにも内容的ではないですが言及しています。私はマルクスの提案したヘーゲル弁証法の転倒がどのようなものかを研究し、そして転倒された弁証法について記述しました。ヘーゲルの弁証法は自我と対象との関係を媒介する意識を主体と見做して、全てを意識に回収する弁証法を作りました。これに対してマルクスは自我と対象という意識の外にあるものを主体と見做して弁証法を事態抽象の働きとして捉えたのです。これがマルクスが実践したヘーゲル弁証法の転倒でした。マルクスはこの転倒された弁証法の特徴を一般的に叙述する意図を持っていましたが、それは実現しませんでした。文化知は私なりの一般的叙述です。

10月12日 ラトゥール研究のまとめ

1. ラトゥールへの近親感

私は今年の1月にラトゥールの『社会的なものを組み直す』を読み、ANTの理論では、私のようなアクターの「野放図な発想」に社会学者は注目し、参与観察すべきと提言していることを知って、興味を持った。

緊急事態宣言が出た4月には『地球に降り立つ』を読み一読して彼が提案している「新しい政治」に共鳴し、彼が提案しているテレストリアルに詳細な調査について私なりに実施してきた。

2. ラトゥールの仕事

ラトゥールは、1989年のベルリンの壁の崩壊と、他方、資本主義諸国の地球環境問題に関する最初の国際会議の開催を、社会主義の崩壊とともに資本主義も危機に直面していると考えて、近代思想そのものの批判的検討をして、近代憲法に代わる新しい憲法（非近代憲法）を構想して「モノの議会」を提案した（『虚構の「近代」』、1991年）。この時点では代理制（議会制）を肯定的に捉えていたが、やがて、1990年代後半に書かれ、後に『近代の〈物神事実〉崇拜について』に収録されている諸論文や『科学論の实在』第9章で、政治理論の転換をはかり、「支配者なしで生きる」（これは社会主義の理想である国家の死滅、政治の死滅も含まれたもの）に対して「支配性なしで生きる」（私が支配者になることを否定する）という新しい政治思想を提起した。その延長上で、『地球に降り立つ』での「新しい政治」という提案があった。

3. 私の仕事

私はソ連崩壊の直前の1988年に、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によることを知り、政治権力を奪取してプロレタリアート独裁の国家を樹立しても、共産主義の理念である商品・貨幣はなくせないことに気づき、商品交換とは異なる交易関係（商品から貨幣を生成させないような、たとえば地域通貨のようなものを手掛かりに作り出せるお金に支配されない生き方）の形成に向けて政治運動から社会運動に転身した。

生協設立運動に参加し、協同組合運動に伴走しつつ参与観察を続け、1997年12月の京都議定書作成の国際会議の先立つ1月に、地球環境問題への対応を研究する社会システム研究所を設立し、1999年には『社会システム研究』を発行した。このときに関係についての把握ができない科学知（哲学も含め）の批判とそれを乗り越える文化知を提案した。こ

の文化知はマルクスが『資本論』初版本文価値形態論で模範を示したヘーゲル弁証法の転倒を、商品の分析だけでなくそのほかの社会分野にも適応しようという提案だった。そして 2000 年には「21 世紀の協同組合運動の課題」を發表し、前半で地球環境問題を取りあげ、地球の物質循環を資本の循環が歪めていることを解明し、資本の制御が必要であることを示し、そのための方策として消費協同組合、働く人の協同組合（生産協同組合）、そして地域通貨による取引を提案した。

4. 二つの仕事(背中合わせの双生児)の接合

私の提案は 20 年経ち、運動は広がってはいるが社会への影響力という面では後退している。他方、ラトゥールの新しい政治思想の提起は、商品や資本に対する研究が欠落していて人々の生活に根ざした提起にはなっていない。

私は協同組合運動の課題のほかに、デジタル経済の発展によって、人々が簡単に起業できることを捉えて、自営業者が増大しており、さらに、コロナ禍で地方移住と農業の開始がトレンドになっている現在、それぞれがつながっていきける新たな政治思想の必要性を感じていた。代理制ではなく、また自主管理や直接民主主義でもない新たな政治を構想できる素材をラトゥールの提起に見ることができる。この新しい政治の創造にそれぞれの現場から参画しよう。

崇拜物としての商品・貨幣の仕様書ーラトゥール宛手紙

親愛なるブルーノ・ラトゥールさま。

初めまして

1. まずは私のあなたの著作との関係について

私は外国語を理解できませんので、海外の書物は翻訳書に頼っています。あなたの『社会的なものを組み直す』（法政大学出版局）、は、2019 年に訳書が出版されましたが、私が読んだのは 2020 年 1 月中旬でした。一読して興味を持ち、あなたの他の訳書『虚構の「近代」』（新評論）と、『近代の〈物神事実〉崇拜』（以文社）、他に『科学が作られているとき』（産業図書）を買い求め、『リヴァイアサンと空気ポンプ』（名古屋大学出版会）も訳されていましたので、それらを紐解いているうちに新型コロナのパンデミックが始まりました。

4 月に入ってあなたの新著『地球に降り立つ』（新評論）を読んでびっくりしました。それまでのあなたの著作は、ANT の方法論であり、サイエンススタディーズであり、近代特有の思想への批判でした。ところが『地球に降り立つ』は、新しい政治の提案とテレストリアル住民への呼びかけだったからです。

私はこの新しい著作を読みながら、同時に私が属している京都の縮小社会研究会（そこにはテレストリアル住民たちがいます）の皆さんに『地球に降り立つ』の勧め」を書き、そうこうしているうちに、あなたの HP に気づいて、アンケートと時評を翻訳してもらって、同じく縮小社会研究会のメンバーにアンケートへの回答を呼びかけました。

2. 1990 年代初頭の社会主義崩壊の原因解明の不足

あなたが提案した新しい政治に共感し、実践的には協力を惜しまないのですが、『虚構の「近代」』を読んだとき、私から見れば、あなたの理論には穴が開いているように見え、そこを補修する必要性をずっと感じていました。その穴はマルクス主義に依拠したソ連社会主義の失敗の原因をめぐるものです。あなたにとっては、この問題は近代思想の欠陥の領域に含まれるものとみなされているのですが、私からすれば、この問題を解きほぐすことで、あなたが提案した新しい政治が、もっと豊かな内容を持ったものとなると思われるのです。

3. フレデリック・ロルドンあて手紙を参照ください

私が解明したソ連社会主義崩壊の原因は次のように要約できます。まず、私が「忘れられたマルクス」を発掘したのは『資本論』初本文価値形態論と交換過程論の新しい観点からの解読でした。それによれば、マルクスの貨幣生成論は、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為による、というものでした。にも拘らず、ソ連共産党は、1917年の革命直後には、政治権力という意志の力で商品・貨幣を廃止しようと試みました。これは無意識の領域にある社会的行為を政治権力の意志の力で廃止しようという背理を含んでいました。その後の70年の経過は述べませんが、この背理がソ連崩壊の根本的原因だと私は考えています。

マルクスの貨幣生成論の復元については、「フレデリック・ロルドンあて手紙」を参照ください。

<https://www.cultural-wisdom.com/blank-26>

4. 「新しい政治」について

あなたの「新しい政治」は、『地球に降り立つ』で明快に提起されています。私は、あなたが1991年に「モノの議会」を構想して以降、第3のアトラクター発見による「新しい政治」の定式化に至る過程について振り返りました。そして、『近代の<物神事実>崇拜』での政治についての見解の転換があったことに気づきました。あなたはこの転換点で、「支配者なしで生きること」と「支配性なしで生きること」を区別し、「支配性なしで生きること」という政治を新たに構想しています。「この支配性なしで生きる」ということは当然「君主としての私なしで」生きるということを含んでいます。

私はこの着想は素晴らしいと思いました。私は自分の政治的経験知から、「革命後の政治」についてずっと考えてきました。ロシア革命や中国革命で、共産党は権力を取ったものの、新しい政治を開発することはできませんでした。現在の中国もそれはできてはいません。晩年のレーニンが提起した「文化革命」にはその萌芽がありましたが、これは育てられることはありませんでした。

このような現状であなたが提起したテレストリアルの詳細な調査にもとづく新しい政治は、文字通り現在の政治に代わる次の政治の輪郭を描いています。この新しい政治のための仕様書づくりに私も参加したいです。

5. 崇拝物の仕様書の追加

あなたが言うように「崇拝物なしでは我々は死ぬ」し、「崇拝物の各々は、一つの反崇拝物として現れる」のですが、ここではそれをもっとも端的に示している、商品と貨幣を取りあげましょう。

商品と貨幣なしでは我々は死ぬし、また、それ自体は神秘的なものとしてあるのではなくて、素材は自然物です。それは関係のなかでだけ社会的な力を持ち、超越的な存在になるのですが、しかし、人々の理性と言語は関係の認識には向いていません。これについて私たちは「文化知」として定式化していますので、「文化知の提案」を参照ください。

<https://www.cultural-wisdom.com/blank-6>

いまは、商品から貨幣が生成される仕様書だけに絞ります。商品自体は私的所有物ですが、同時にそれは社会的なものである価値の担い手です。この価値の担い手としての諸商品が取り結ぶ諸関係が価値形態ですが、この価値形態のなかの一般的価値形態が生じることではじめて、諸商品は社会的な形態を取ることができます。しかし、商品所有者が自分の利害しか頭になれば、一般的価値形態は崩れ去って、『資本論』初本文価値形態論だけに採用されている第IV形態となり、商品の社会的形態は消失してしまいます。実はここがヤマなのです。

価値形態論では商品の所有者たちは主体として登場していません。そこでの主体は諸商品でした。現実の市場での諸商品の社会的形態は諸商品の価格です。そこにはすでに貨幣

が存在しているのですが、この貨幣の生成過程を、マルクスは価値形態論と交換過程論という二つの領域を横断することで明らかにしたのです。前者では諸商品が主体で後者では諸人格が主体です。まず、貨幣の概念の生成過程を、諸商品を主体として語らせている、これがマルクスによって解明された価値形態論でした。

他方、商品所有者たちが登場するのは、価値形態論の次に用意されている交換過程論です。そこで、商品所有者たちは、価値形態論の最終帰結である、貨幣形態が形成できない第Ⅳ形態を迎えるのです。というのも、この第Ⅳ形態は、商品所有者たちが自分の商品でほかの商品を買おうとする当たり前の意志をもつときに生まれます。ところがみんながそうすると、誰も買えないことになります。

商品所有者たちは当惑しますが、自分の意志ではなくて、商品を主体としてそれに従うことで共同行為が生み出され、貨幣が生成されます。こうして形成される貨幣の生成については商品所有者たちに意識の中では、概念化されません。商品所有者たちは単に自分の商品に値付けをするという意識しかないのですが、この行為が実は無意識のうちでの本能的共同行為への参加なのです。つまり今日においても、商品所有者たちは、値付けをするつど貨幣を生成しているのです。

この、いままでマルクス主義者が決して気づくことのなかったマルクスの貨幣生成論は、ANTの方法論と親和的です。というのもマルクスは商品を単なる物として欲望の対象として扱うのではなくて、それを主体とみなし、大勢の商品所有者、それぞれの諸商品、これらが織りなす各種の価値形態を、アクターのネットワークとして分析しているからです。

ここから判明する仕様書の概略を記述しておきましょう。

- ① 諸商品の関係そのものは超感性的であり、その認識は人々の理性の彼方にあります。
- ② この超感性的なものは、感性的に把握できる関係の両極に注目し、それが単なる物としてではなくて、新しく社会的役割の担い手となっていることを発見することを要請しています。マルクスはこの仕様書を形態規定と名づけました。
- ③ 例えば商品の価格のように、貨幣は商品の価値がいくらかという情報を人間に伝えることができます。ここではあたかも商品が思考し、価値の量を判断する材料として貨幣を利用しているかのようです。つまり、諸商品はお互いに関係しあうことで、思考し判断するある種の概念的存在となっているのです。
- ④ その際、関係の両極は、関係しあうことでお互いに抽象し合い、判断を析出するのですが、商品にあつての概念の生成は、思考による分析的抽象とは違って、関係の両極がお互いに働きかけ合う、総合によってなされています。いわゆる事態抽象がそこではなされるのです。
- ⑤ したがって、思考における分析的抽象とは区別されたものとして、関係における総合による抽象化を思考が了解することが問われているのです。

6. 新しい政治の豊富化

アクターネットワークにおいては、思考とは異なる仕方での概念の形成がなされていること、このことを考慮した政治はいかなるものとなるのでしょうか。

「支配性なしで生きること」「君主としての私なしで」生きること、これは現実には、思考による抽象作用の限界を知り、事態抽象の世界が開けていること了解によって支えられるのではないのでしょうか。たとえば人々が政治的関係において両極として形態規定されるときに、ミードが言う一般的他者の態度を取るのではなくて、他の選択肢を選べるような政治の仕様書の作成など。あなたの新しい政治の提案に励まされて、今後も研究を続けていくつもりです。

調査報告

新型コロナ後の世界を読む(第三回)

気候変動に対応できる新しい政治の形成過程

第1章 <物神事実>とは何か

1. はじめに

今年になってから、ラトゥールの著書を読み始めたのですが、一群の訳書は、まるで底なし沼のような感じです。この世界そのものが実は底なし沼であり、近代人は主体と客体というように現実を切り縮めて、なんとなく分かったつもりになっていたのでしょうか。この二分法を拒否したラトゥールの世界は、現実世界同様に底なし沼になっているのでしょうか。

人類にとって、コロナ禍の渦中での課題は気候変動に対応することですが、そのためにはまずは世界が底なし沼であることに気付くことが肝心なかもしれません。そう考えると、ラトゥールの『近代の<物神事実>崇拝について』(以文社)の解説も、読者のみなさまの、底なし沼への招待として位置づけられます。私は、この書でのラトゥールの展開を、何とか分かるようにしようと想着て、今までさんざん苦労してきたのですが、それはやめて、検討のための素材を提供することにします。

とはいえ、簡単なあらすじを述べておいたほうがいいでしょう。ラトゥールはこの書で、事実が物神として現れることは何故か、という問いを立て、そして、現実そのものが、事実と物神とを兼ね備えたものであるという意味で<物神事実>(これは事実:ファクト、と物神:フェティッシュ、とから合成した、ファクティッシュの訳語)という言葉を新たに作りだし、この言葉で底なし沼の解説を試みています。この<物神事実>とは、1991年に出版された『虚構の「近代」』(新評論)では、主体と客体との間にある、「ハイブリッド」と呼ばれていたものについての新たな規定です。つまりこのハイブリッド(人間と自然とが混ぜ合わされた現実、科学技術や、地球環境問題などで、これがなければ近代は成り立たないのに、近代人にはこれに対する認識が欠落しているという事実を指摘した用語)が物神性を持っているということに気付いて、1995年にこの書の第一部に収録されている論文を書いたのです。

私が一番注目するのは、ハイブリッドが<物神事実>であるという認識を得たことで、ラトゥールの政治思想が変わっていったことで、この点については会報 295号「ラトゥールの『地球に降り立つ』の勧め」で指摘しましたが、この政治観の転換は、この書の第二部の論文の中に、新たに2002年に書かれた論文から組み込まれたものでした。それで、若干混乱するのですが、その組み込まれた元の論文は、2002年の展覧会のパンフレットですが、それ自体この書の後半部分に収録されているのです。その上に、1999年に出版された『科学論の实在』(産業図書)の第9章には<物神事実>の考察があり、そこで新たな政治の原理が述べられているのです。何かこれ自体が泥沼的ですが、政治観の転換は、この書の第一部に収録された1995年の論文にはなくて、1999年の『科学論の实在』第9章で新たな政治の原理的考察があり、そしてそれにもとづいて、2002年のパンフレット(この書の第二部に差し込まれた)で定式化され、そしてそれが『地球に降り立つ』(新評論)で気候変動に対応できる新たな政治についての具体的な提案として実を結んだと思われまます。

というわけで、この書第一部の、1995年に書かれた部分の紹介から始め、ついで、ラトゥールの新たな政治の形成過程を、1999年の『科学論の实在』第9章と、2002年に書かれた、この書第二部を検討することで跡付けることにします。それでは、『近代の<物神事実>崇拝について』という底なしの沼に招待しましょう。

2. ド・ブロスのフェティシズム論

ラトゥールのこの本は不思議な本です。物神崇拝の批判が試みられているのですが、マルクスやルカーチの議論とは全く異なるのです。反物神崇拝について書かれているので、ついこれらの伝統的な発想から理解しようとするのですが、そのような読み方ではてんで理解不能なのです。そういうわけでまずは、ラトゥールの本の出だしの部分の要約をしてみます。

この部分のテーマは、「いかにして近代人は新たに接触する集団のもとに物神をつくるのか」という小見出しにあるように、ヨーロッパ人とアフリカ人との関係です。そしてその関係も、偶

像崇拝をめぐって引き起こされている意識の上での動きにもとづき、対話を創作しているのです。その際にラトゥールがモデルとしているのは、1760年に出版されたド・ブロス『フェティッシュ諸神の崇拝、ないしエジプトの古代宗教とニグリシアの現在の宗教との比較』（『フェティッシュ諸神の崇拝』法政大学出版局、2008年）です。せっかく翻訳されていますので、ラトゥールの要約に役立つ限りで引用しておきましょう。

「アフリカの西海岸の黒人やエジプトの隣国であるヌビアにいたる内陸の黒人たちは、ヨーロッパ人が『フェティッシュ』と呼ぶある特定の崇拝物を礼拝の対象としている。・・・これら神的なフェティッシュは、各民族や各個人がそれぞれ選び、神官たちに儀式で聖別してもらう任意の物的対象に他ならない。・・・そのどれもが黒人にとってことごとく神であり、聖なるものであり、また護符である。」（『フェティッシュ諸神の崇拝』、11頁）

フェティッシュはふつう物神とか呪物と訳されますが、これはド・ブロスによれば、セネガルと貿易するヨーロッパ商人が作り出した用語です。このフェティッシュは、具体的には一片の材木であったり、小石や貝殻、花、動物など様々ですが、黒人にとってはこれらが神であり、ラトゥールは、これらの偶像と呼んでいます。そして、ラトゥールは、ド・ブロスのこの書に依拠して、ギニア人とポルトガル人との間の対話を創作しているのですが、その元ネタは、ド・ブロスがその書の12頁から31頁にわたって述べている事柄です。しかも、話のオチまですでにド・ブロスが述べているのです。それは次のような内容です。

「ところで、先に進む前に今一つ注意しておかねばならないことがある。それは、特定の自然の産物に対するこの崇拝（フェティシズム）が俗に偶像崇拝（イドラトリ）と呼ばれる、人工物に対する崇拝とは本質的に違うということである。このような人工物は、崇敬の念が本当に向けられる別の対象（神）を表象しているにすぎない。それに対して、フェティシズムは、生きた動物や植物そのものに直接に向けられているからである。」（同書、31頁）

キリスト教の考えからすれば、崇拝（ラトリア）とは、神のみに捧げられる礼拝で、崇敬（ドゥリア）とは、聖人や聖像に捧げられる礼拝のことです。ここでド・ブロスが、特定の自然物を神として崇拝する黒人の崇拝をフェティシズムと見做し、それを偶像崇拝と区別していることに注目しましょう。ド・ブロスは黒人の信仰を、宗教以前のものにとらえ、人工物である聖像を神の像と見做して崇拝と崇敬とを区別するキリスト教の立場から、黒人の信仰を批判しているのです。

3. 新たに創作されたギニア人とポルトガル人との対話

さて、ラトゥールが創作した対話に移りましょう。ポルトガル人は、ギニア人が偶像を神と見做していることに我慢がならず、偶像を自分たちで作っておきながら、それが神だという考え方は矛盾していると感じています。他方で、ギニア人は、偶像は確かに自分たちが製作したものであり、それが本当の神であってどこがおかしいのかと反論します。このある意味では歴史的な論争を踏まえて、ラトゥールは、もしギニア人が反論したら、と考えます。

というのも、ポルトガル人も聖母マリアのお守りを持っているからです。そのお守りは作られたものでしょう、と聞き返せばそうだという答えが返ってくるし、それは神聖なものでしょうと問い返せば、そうだというでしょう。何も違いはないではないか、と。ところがこの違いを認識しようとするれば、神学の助けが必要になるとみて、ラトゥールは、次のように結論付けています。

「（ギニア人たちは）打ち倒された物神とそれに代わって建てられた聖像との違いがよく分からない。・・・『崇拝』と『崇敬』の違いさえも認識せず、・・・彼らは、人間による人工物の構築を、決して誰も構築していないものの決定的な実在性から分かつ深淵を、把握することを拒否する。内在性と超越性の違いさえも彼らには見逃されているようだ・・・。どうすれば彼らを未開人と見做さず、物神崇拝を未開宗教と見做さないことができようか。」（『近代の〈物神事実〉崇拝について』、26頁）

これは偶像自体が神であるとみなす物神崇拝を打倒して、偶像を神の聖像へととらえなおしたキリスト教の歴史を踏まえたものなのでしょうが、キリスト教徒ではない私には、ギニア人同様皆目わかりません。ラトゥールは、この心境をヨーロッパ人の共通感覚と捉えてこれに「反物神崇拝者」と名付けます。そして、これについて次のように述べています。

「信徒たちは、完全に自立しているのでも完全に構築されているのでもない何かを示している。

それに対して信仰という概念は、この繊細な操作を、物神と事実の間に掛けられた脆弱な橋を、二つに切断する。そしてこの概念は、近代人たちが他のすべての人間集団を素朴な信者たちや、裏で操る巧みな人々や、自らを欺く冷笑的な人々と見做すことを可能にしている。」(同書、30頁)

ここからわかることは、ラトゥールが「反物神崇拝者」としてヨーロッパ人をとらえる場合に、ヨーロッパ人の何が問題にされているのかと問うと、それが「信仰」であることがわかります。ヨーロッパ人は、ギニア人が偶像を信仰している、という信仰を持っているとみているのです。そして、ヨーロッパ人は、ギニア人が自ら作り出した偶像を神と見做していることに対して、自身が作り出したマリアの聖像の場合、その聖像自身とそれが果たしている神としての社会的役割を切断することによって、ギニア人に対抗していると考えられるのです。ここから、ラトゥールは、一般論として、人間が作った物(事実=内在性)と、それが持つ社会的性格(物神=超越性)とのつながりを「信仰」という概念が切断するという見地を導き出します。このような考え方はキリスト教徒以外には理解できませんが、このポイントを押さえたいうえで要約を終え、ラトゥールの以降の展開を見ていきましょう。

4. いかにして近代人は自分たちのもとで物神を構築するに至るのか

冒頭の創作対話は「いかにして近代人は新たに接触する集団のもとに物神をつくるのか」ということがテーマでした。この対話から「信仰」ということ概念が問題だとみなしたラトゥールは、今度は、ヨーロッパ人自体がどのようにして物神を構築しているか、という新たなテーマを作ります。そして、黒人を物神崇拝者だと批判した白人を反物神崇拝者と名付けて、その非難の仕方自体の中に、白人自身もまた物神を構築していることを証明しようとしているのです。つまり、白人たちは、黒人たちが物神を信仰しているというように信仰しているが、黒人自身は白人たちを理解するために信仰を問題にしたりはしない、と見て、この黒人の立場を白人自身に用いてみようというのです。それは次のようになされています。

まず、黒人に対する非難の内容が次のようにまとめられます。

「その糾弾によれば、物神崇拝者は力の源泉について思い違いをしているという。物神崇拝者は、自分自身の人間的な作業、自分自身の人間的な諸幻想、自分自身の人間的な諸力と通じて、自らの手で偶像を作った。しかし彼は、その作業、その諸幻想、そしてその諸力を、自分が作った対象それ自体に帰する。」(同書、32頁)

このように糾弾することによって、白人たちは、偶像が力を持たないことを黒人に説明しようとするのですが、ラトゥールは、そうすることで白人たちは矛盾に陥るとみて次のように続けます。

「物神など何でもない」と主張するまさにその時に、物神は作用し始め、全てを移動させ始める。物神は、とりわけ力の起源を反転させることができる。それどころか、反物神崇拝者たちによれば物神の効果はその製作者が物神の起源を知らない場合にのみ効力を持つので、物神は自らの政策を完全に隠蔽することができるはずである。物神のおかげで、魔法の杖のたった一振り、その制作者は、冷笑的に裏で操る人物から、騙されてしまった誠実な人物へと変身することができる。このようにして物神は、そこから人間が作り出すもの以外の何物でもないのにも拘らず、しかしながら、ちょっとした何かを付け加える。つまり物神は、行為の起源を反転させ、裏で操る人間的な作業を隠蔽し、創作者を被造物へと変化させる。これほど多くの驚嘆すべきことを為すことのできる対象の効力を、いかにして否定できようか。

しかし物神は、さらにそれ以上のことをしている。物神は人間の行為と作業の性質自体を変えるのだ。」(同書、33~4頁)

これはどういう意味でしょうか。物神が持つ超越的力が、ギニア人が信じている偶像にはない、と批判するとき、反物神崇拝者であるヨーロッパ人も偶像以外の超越的なものの存在を否定していないことがわかります。そしてその超越的なものは、偶像とは別に存在しているのですが、しかし、その存在は人間が作り出す偶像に何かを付け加えるわけであり、ヨーロッパ人も物神を作っているというのです。そして次のように問題設定をしています。

「物神のない世界は、物神の世界と同じくらい多くの外来者で溢れている。転倒の転倒は、物神への錯覚的な信仰によって転倒したとされる世界と同じくらい不安定な世界へ到達させる。反

物神崇拝者は、誰が行動し誰が行為の起源を見誤っているのか、誰が支配者で誰が疎外されたり取り憑かれたりしているのかということについて、『物神崇拝者』と同じくらい知らない。したがって物神は、みずからの効力を喪失するどころか、近代人のもとにおいてさえ、信仰の起源を、そして支配が可能であるという確信自体を、ずらし、震ませ、転倒し、乱すべく、たえず作用しているように見える。物神から取り去ろうとする力を、物神は直ちに取り戻すのだ。最終的には、誰も信じてはいない。黒人たちが物神崇拝者でないのと同じくらい、白人たちも反物神崇拝者ではない。ただ白人たちは、他の人々のもとでは至る所で偶像を立ち上げ、直ちにそれらを破碎し、そして自分たちのもとでは、行為の起源をまき散らす操作者をいたるところで増殖させているのだ。そう、物神崇拝者も反物神崇拝者も偶像に対してかなり奇妙な崇拝をしているのであり、我々はこれからそれを解明しなければならない。」(同書、36～7頁)

ここで「行為の起源」と名付けられている事柄が重要でしょう。これはまさしく人間と非・人間とのネットワークであり、主体と客体との中間にあり、人々の認識からは取り残された領域で、これが近代社会の創造者なのですが、近代人はそれをそういうものとしては認識できないのですね。ラトゥールは、この書では、この認識できない原因を物神崇拝者や反物神崇拝者に共通の、人々が製作するという行為と製作されたものとの間の、近代に特有の神秘的関係が成立する根拠を探ろうとしているのです。

5. いかにして近代人は事実と物神を区別しようと努め、しかしそれに成功しないのか

行為の起源が隠されているとしても、近代人は理性的存在ですから、理性の力でそれを解明しようとします。しかし、ラトゥールは近代的理性(近代知)を持つ白人自体もそれが非難する黒人の物神崇拝と「信仰」においては変わらないとみて次のように述べています。

「他の人々のもとに素朴な信仰があると信じたり、もしくは自分たちのもとに信仰でない知識があると信じたりするために、なぜ近代人は複雑な諸形式に頼らなければならないのか。なぜ彼らは、あたかも他の人々が物神を信じており、その一方で自分たちは最も厳格な反物神崇拝を実践しているかのように、振舞わなければならないのか。なぜ物神崇拝者も反物神崇拝者も存在しないとまったく率直に認め、我々の生活に密接に係っているあの奇妙な効力、あの『行為の移動者』の効力を認めようとしないのか。それは、近代人が事実と物神の間のある本質的な差異に固執しているからである。信仰は、物神崇拝者の精神状態や反物神崇拝者の素朴さを説明することを目的としていない。信仰は全く別のことに起因している。すなわち知識と錯覚の区別に起因しており、あるいはむしろ、以下に続く諸節で確認するように、この区別を行わない実践的な生活形式とこの区別を維持する理論的な生活形式との間の分離に起因している。」(同書、37～8頁)

ここでラトゥールは、近代人が、物が物神として、不思議な力をもった物として立ち現れることを決して認めようとせず、それを認める人々には物神崇拝者という批判を投げつける反物神崇拝者であること自体が問題解決を見失わせるものだとして指摘しています。そして、人間が作った物が神秘的な力を持つということ認めることから出発することを提案しています。そして、近代知の特徴について次のように描いています。

「彼らはただ一つの操作者を使う代わりに、二つの操作者を使うのである。物神に対する行為者たちの素朴な信仰を告発するとき、近代人たちは、主体を中心に据えた自由な人間的行為を論拠とする。しかし、行為者たちの主体的な自由に対する行為者自身の素朴な信仰を告発するとき、批判思想家たちは、彼らが築き上げて完全に信用している客観的科学によって認知されるような客体を論拠とする。したがって彼らは、普通の素朴な人々へ逆に辿って二度到達するための起点として、<魔力を持つ対象>と<事実としての対象>を交互に用いるのだ。」(同書、40頁)

「二つの告発形式は見間違えるほどよく似ている。諸原因への信仰をもつ批判的思想家が、偶像への信仰をもつ素朴な人と同じ位置を占めているのだ。・・・信仰という概念が、物神と事実という二重の語彙によって近代人が自分たちなりに行為の起源を理解することを、可能にしているのだ。」(同書、41～3頁)

ラトゥールはこの後、図式まで作ってこの類似を説明していますが、この信仰という点において、決して白人ではなくて、むしろギニア人に類似している私たちにとっては立ち入る必要はないでしょう。次の「いかにして事実と物神は近代人のもとでさえその効力と混ぜ合わせるのか」でパストゥールの実験を例にして説明されている部分のほうが理解しやすいのでそちらに移り

ましよう。

ラトゥールの科学論の出発点は『細菌と戦うパストゥール』（原書 1985 年、偕成社文庫）にまとめられているパストゥールの酵母の発見とワクチンの開発についての研究でした。ラトゥールは、あるところでは、パストゥールに発見されるまでは酵母菌は存在していなかったと言ってみたりするので誤解されがちです。酵母菌を利用して発酵乳を作ることは昔からあるからです。しかし、それを実験室で再現して、発酵の原因が酵母菌にあることを突き止めたことの意味をラトゥールは、問うているのです。

科学論の分野では構築主義と実在論の対立がありました、構築主義の立場とは全ては人間によって構築されたものだ、と見るもので、人間の外部にある実在を否定します。ところが、パストゥールの実験ノートには、彼が酵母菌を実験室で構築したのだが、同時にそれは実在している、という記述があるのです。

「パストゥールは矛盾したことを言っただろうか。批判的思想の観点から見れば、言った。パストゥール自身から見れば、したがって我々から見ても、言っていない。パストゥールにとっては、構成主義と実在論は同義語である。『事実は作られている』ということ、我々はパシュール以来知っている。しかし批判的思想は、この曖昧な語源の中に対象への物神崇拜を見るように我々を調教していた。われわれの研究室の中で、我々の同業者たちと共に、我々の道具と我々の手を使って、我々が諸事実を作っているのに、それらの事実は、魔術的な逆転効果によって、決して誰も作ったのではないもの、政治的見解のあらゆる変化や感情のあらゆる苦しみを乗り越えるもの、誰かが乱暴にこぶしで机をたたいて『これが動かしようのない事実だ』と叫んでも動じないもの、そのようなものになるというのだ。反物神崇拜者たちの主張によれば、構築作業の後に事実は『自立性を獲得する。』（『近代の<物神事実>崇拜』、49 頁）

ここの記述は、商品念頭に置くとうわりやすいでしょう。商品は紛れもなく生産者がいて、作製されたものですが、それが市場で交換される時には価格を持ちます。この価格は、その物の具体的な制作過程からは自立したものです。だから、商品は生産された後は自立性を獲得します。この視点を持つ人たちが反物神崇拜者であるとか批判的思想として一括されているのでしょうか。パストゥールの主張が矛盾しているという二つの理論的立場を共に退けて、ラトゥールは、次のように、パストゥールの実践に従うことを勧めています。

「我々には別の回答が提案されている。しかしこの回答は、批判的思想を放棄し、信仰、魔術、自己欺瞞、自立などの概念を忘却し、我々を誇り高き近代人にしていた眩いばかりの支配性を喪失することを前提としている。

反物神崇拜を我々の知的生活の本質的な資源とすることをやめ、近代人についての人類学の研究対象とすることでそれを回避するや否や、新たな目録が現れる。第一の目録は『フェ (fait)』という語の二つの意味の間で選択することを強いる。構築されたのか、それとも実在するのか。第二の目録は、『その通り、確かに私はそれを研究室で構築した』、『それゆえ自立的な酵母が公正な観察者たちの目に単独のものとして現れる』という二つの文をパストゥールが同義語と見做すとき、彼につき従う。」（同書、50～1 頁）

キリスト教の文化を欠いた日本では、ここまでの紹介は、一層の底なし沼だったようですが、ようやく、ラトゥールが、<物神事実>について説明するところにまでたどり着きました。

6. いかにして「物神事実」の技量は理論から逃れるのか

ラトゥールは、批判的思想に与していない「普通の行為者は、この上なく自明であることを、すなわち自分で構築したものに自分が少しばかり超えられているということを、一気に断言する。」（同書、56 頁）と述べたうえで、次のように「物神事実」という用語の由来を説明しています。

『事実』という語は外部の実在を、『物神』という語は主体の常軌を逸した信仰を指し示しているように見える。両者ともに、それらのラテン語語源の深みの中に、事実についての真実と精神についての真実を可能にしている強烈な構築作業を隠蔽している。我々が抽出しなければならないのはその真実なのであり、夢想到満ちた心理学的主体が生み出した駄作や、天から降ってくるかのように研究室に降ってきた冷淡で非歴史的な対象の外在的存在などを信じてはならない。我々は、構築と収集、内在と超越の間の差異を決して信じずに実践を行動に移すことを可能にす

るこの揺るぎない確信のことを、二つの語源的起源に結び付けて、『物神事実』を呼ぶことにする。」(同書、57頁)

このように、近代人が事実と物神とを区別しようとしても成功していない、という現実を解消するための補助線として引いたものが<物神事実>という新用語でした。はたしてこの補助線は役立つのでしょうか。

7. <物神事実>論の新展開とその限界

『科学論の实在』第9章は、『近代の<物神事実>崇拜について』第一部が書かれたのちに作成されたもので、それまでの探求の限界について触れています。もちろん『科学論の实在』の冒頭に置かれている謝辞で「私は、読者に対して、本書は新たな事実に関する書物でもなければ、厳密には哲学書でもないことを警告しておくべきだろう。私は、本書において、きわめて基本的な道具のみを用いて、主体と客体の二分法によって取り残された空っぽな空間の中に、人間と非・人間のペアのための概念的舞台背景画を提示しようと試みているだけである。」(『科学論の实在』、ii頁)と述べているように<物神事実>という把握以外の方法での解明もあれこれとなされているのですが、<物神事実>という把握に立ち返った第9章では、この書でのそれまでの試みを振り返って次のように述べています。

「なんとということだろう！ どうやら私は、われわれを支配していた古い決着法を解体するという課題を達成してしまったようだ。誘惑犯の隠れ家は明らかにされ、非・人間は自由になった。すなわち、『客体』というさえない外見の制服をまとして、民衆に対する政治的戦争に兵隊を供給し続ける卑しい運命から自由になったのだ。……けれども、私はまだ何も達成していないようでもある。これまでの章で私は、理性の真っすぐな道をたどらない諸運動の数を増やしてきた。……しかし、決定的な局面において、一回の跳躍で構築物と真理を飛び越えられるような用語を探した時にはいつでも、言葉は私の手から滑り落ちてしまった。」(同書、347頁)

主体と客体の中間にある人間と非・人間のペア、これの实在についていろいろと試みてきたラトゥールにとっての困難は、いったん固定したと思われた「概念的舞台背景画」が、できたと思われたとたんに破棄されてしまっている、という問題でした。それはどうしてでしょうか。ラトゥールはその理由について次のように述べています。

「人間と非・人間の関連は、ひとたび明らかにされ、修正され、整理整頓されたならば、常に全く異なったもの、——主体と客体の戦争で対立する二陣営——へと変貌を遂げてしまうのはなぜなのだろうか？

何かが欠けているのだ。いずれの章でも、何かがわれわれから逃れてしまっている。それは、客体と主体の間の平和的な往来を交渉する方法、これ以上火に油を注ぐことなくこの闘いを終わらせる方法である。われわれは、この行き詰まりを完全に回避する手段を必要としている。すなわち、『それは实在か、それとも構築されたものか？とっとと選べ！』という脅迫的な選択によって、実践の精密な言語を構築する代わりに、それとは異なった動き、異なった実践の記録法となる伝達手段や発話形式が必要なのだ。確かなことが一つある。ひとたび理論が分析の刃を向け、骨の折れる音が聞こえたならば、どのようにして<善き生活>を知り、作り上げ、生きるかを説明することがもはや不可能であるということだ。われわれには、主体と客体、言葉と世界、社会と自然、精神と物質など——これらの破片は、いかなる和解も不可能なものにしてしまうために作られた——を寄せ集め、つなぎ合わせることにしか残されていない。どうしたら往来の自由を回復できるのだろうか？」(同書、348頁)

ここでラトゥールは面白いことを言っています。それは理論的分析の破壊力です。ベーコンによれば、実験とは自然を拷問して自白させる試みだそうですが、ラトゥールも思考による分析が、分析対象を壊してしまうことに気付いたのです。しかし、思考にとっては分析的抽象を行うことなしには対象の概念に到達できません。ではどうすればいいのでしょうか。

「どこに解決策があるのだろうか？ 破壊の瞬間そのものである。この章で試みたいのは、実践を粉々に打ち砕く行為自体に意識的になることである。……理論と実践の差異は、文脈と内容の差異や自然と社会の差異と同様に、所与のものではないのである。それは作られた分断なのだ。より正確には、それは、強力なハンマーの一撃で砕かれた一つの統一体なのだ。」(同書、349頁)

さしあたって、ラトゥールが提案するのは分析の一步手前で立ち止まることです。私の場合は、ここでラトゥールが問題にしているのは関係の把握であり、関係それ自体は感覚的に認識できず、認識できるのはその関係の両極ですから、両極が関係においてお互いに抽象しあっているという事態抽象の働きを把握することを提案します。つまり思考による分析的抽象は、感覚に現れている対象をいったん破壊し、そしてそれを総合することで組み立てるのですが、関係一般は感覚では把握できないので、このような思考の方法によっては捉えられないのです。世界が底なし沼であることも、世界が関係に満ち溢れていて、思考による分析によっては捉えきれないことによると言えるかもしれません。

横道にそれでしたが、では立ち止まり、打ち砕く行為自体を意識せよというラトゥールはどのような解を提案するのでしょうか。そこでラトゥールは、『近代の<物神事実>崇拜について』でケースステディとして取り上げた、ジャガンナートの例に立ち返っています。この話は、インドのカースト制度の最下級である不可触民の人々が石（聖なるサリグラム）を崇拜しているのですが、この物神崇拜をやめさせようと、ジャガンナートが、石は聖なるものではなく、ただに石ころだから触ってみるように人々に強要するというお話です。結局この試みは成功せず、ジャガンナートは、こういうやり方では、物神崇拜を止めさせられないばかりか、人間的な関係を破壊してしまうことに気がきます。ラトゥールはこの話にもとづいて、次のように結論づけます。

「勇敢な偶像破壊者は何を破壊したのだろうか？私は、破壊されたのは物神ではなく、かつて議論や行為を可能にしていた、議論し、行為する方法なのだと主張したい。」（同書、353頁）

このように述べた後、ラトゥールは<物神事実>という補助線の果たす役割について次のように述べています。

「事実には実験室におけるその制作過程をつけ加え、フェティッシュにはその制作者による明白で再帰的な製作過程を付け加えるならば、批判のための二つの主要なリソース——ハンマーと金床——は消失する。そのかわりに出現するのは、偶像破壊者によって壊されはしたが、常にそこに存在し続けたものである。それは、常に新たに刻み直されなくてはならないもの、行為し、議論するのに不可欠なものである。私はこれをファクティッシュと呼ぶことにする。ファクティッシュは、事実とフェティッシュの両方の制作者の行為を明示的に回復すれば、両者の大虐殺から回収することが可能である。二つの破壊されたシンボルの対称性が元通りになる。もしも偶像破壊者が、石に精霊を宿させるくらい素朴な信仰者が存在するなど素朴にも信じることができたのだとすれば、それは、偶像破壊者もまた、偶像を破壊するために彼が用いる事実そのものが、いかなる人間の働きの助けなしに存在しようと素朴に信じているからである。」（同書、358頁）

このようにラトゥールは、<物神事実>という補助線によって分析（ハンマー）の一撃を消去してしまえると主張しています。

「ファクティッシュという解決策は、多くのポストモダンのように、次のように述べて、実在か構築化という選択を無視することではない。『もちろんそうだとも。構築と実在は同じものなのだ。すべてはまさしく幻想であり、物語であり、みせかけなのだ。今時、誰がこんな些細なことで争うだろうか。』これに対しファクティッシュは全く異なったことを提案する。あるものが非常に実在的で、自律的で、われわれ自身の手から独立したものであるのは、それが構築されているが故である、と考えるのである。」（同書、359頁）

このような補助線の役割について一旦承認してみましよう。でもこれに続いて次のような事柄が述べられているのを見ると疑問がわいてきます。

「偶像破壊者のハンマーによる打撃が常に的を外していたと気づくことは、なんと奇妙なことだろうか。・・・商品崇拜の幻想を非難したマルクス、常に見失われているものの恐るべき発見を封印するための停止装置にフェティッシュを変換させたフロイト、ハンマーを手にしてあらゆる偶像を破壊した哲学者、あるいはより正確には、偶像がいかに虚ろな響きをあげるかを聞くために軽く叩いた哲学者であるニーチェの相続人ではないのだろうか？この逆を信じることや、この系図、この高名な系譜を手放すことは、古代的、反動的、さらには異教的になることだという深刻な非難を受け入れることになるだろう。どうしたら、このようなばかげた立場が、政治の別のモデルにつながりうるのだろうか？」（同書、378～9頁）

ラトゥールが『資本論』をちゃんと読んでいないのは仕方ないとしても、マルクスが商品の物神性を解明したことを、反物神崇拜者によるハンマーの一撃と見做す見解にはついていけません。

マルクスは商品の物神的性格について、その秘密を暴きましたが、しかしそれがなされたのちにも物神性は消えることはない述べているのであって、決して物神性をハンマーの一撃でなくせると主張したわけではありません。もちろんフランスのマルクス主義者たちが物神性を一撃で破壊しようとしていたのかもしれませんが。

では、お返しにマルクスの立場から、ラトゥールの補助線について批評してみましょう。ラトゥールの「あるものが非常に実在的で、自律的で、われわれ自身の手から独立したものであるのは、それが構築されているが故である」という理解を商品に適用してみましょう。商品は単なる自然物ではなくて、使用価値（物そのものの用途）と交換価値（他の商品との交換比率）を持つ二重物です。使用価値としての物の構築は製造工程であって、感覚的に理解されるものですが、製造された物がいくらの交換価値を持つかは、社会的な関係によって決定されます。この社会的な関係による決定は、人々の手から独立したものですから、商品を自律的で独立したものへと転化します。そしてこの自立したものという外観が物神性なのですが、ここでは人間の社会的関係がモノとモノとの関係であるかのように現象しているのです。これはある使用価値が商品になる場合に起きることで、自家消費される場合には決して我々の手から独立したものにはならないでしょう。ラトゥールの言うように構築されたものだから必ず自律化する、ということはないしく物神事実>という補助線も、このような理解だと有効性はあまりないと判断せざるを得ません。

ラトゥールには実験室の研究がありますが、実社会の商品生産の研究は見当たりません。それではマルクスに対する反発も、見当はずれになってしまいます。私は、会報 279 号でマルクスの貨幣生成論を発掘し、295 号にはこの見地からラトゥールの見解へのコメントの必要性を提起しましたが、その作業が急がれます。

第2章 新しい政治の探求

1・はじめに

底なし沼のようなく物神事実>論を経由して、本題の新しい政治の形成過程に移ります。ラトゥールの政治的発言は、1991 年の『虚構の「近代」』でのモノの議会の提案でした。現実の政治の原理は憲法で定められていますが、その憲法は人間社会の統治の原理であり、人工物としての国家の形成は社会契約によるというものでした。ラトゥールはこの憲法が、人間だけを対象としたもので、この社会で限りなく増殖しているハイブリッドについては視野に入れられてはいないことを批判し、ハイブリッドを視野に入れた政治としてモノの議会の提案したのでした。気候変動に対応できる政治とは、地球も含めたモノの状態を把握しそれに対して適切な対応をすることが問われているのです。ラトゥールがこの時点では、ホップズとボイルの論争を取り上げて、人間社会と自然とに世界を二分割し、双方が干渉できないような政治理論の問題点を指摘したのでした。これについては会報 298 号で報告しています。

以降、ラトゥールは、1995 年の論文で<物神事実>論を展開し、1999 年の『科学論の实在』でこれを補強しつつ、2002 年の展覧会のための文書で、新たな政治の原理的考察を進めました。このような経過があって『地球に降り立つ』での「新しい政治」の提案にいたったのです。今回はこの経過を追って、ラトゥールが解明した新しい政治の原理について整理します。

2. 政治の原理の考察

経済のことについては素人同然のラトゥールですが、政治に対する感性はいつも感心させられています。日本人に決定的に欠けている資質です。

『科学論の实在』では、第 7 章 サイエンス・ウォーズの発明、第 8 章 科学から解放された政治、の二つの章で、政治の原理についての考察がなされ、第 9 章と結論でも補足的説明がなされています。でもこれらの章で展開されている内容を逐一拾い上げることは非常に困難です。ポイントだけを取り出しておきましょう。

まず、ラトゥールは、第 7 章と第 8 章ではプラトン『ゴルギアス』（ソクラテスとカリクレスの対話）を素材に、それを通常の解釈とは逆の立場から解読しようとしています。プラトンの真意は、健全な政治体を作り出すための諸道具の提案でしたが、ラトゥールは、正義がなければ力が取って代わるといふ、プラトンの作品の主人公ソクラテスのように、理性を求めて叫ぶことは

理にかなっているか、という問題意識で次のように述べています。

「私は、科学を政治からもう一度区別し、＜政治体＞が不可能で、無力的で正当性を欠いた、生まれながらの厄介者となるような仕方では發明されてしまった理由を説明できるようにするために、その歴史を調べてみたいと思う。」(同書、277頁)

実は、ラトゥールは、この古典的な政治論である、正義のないところには力がはびこる、という議論が成立することで、政治が生まれながらの厄介者となったとみて、その解説をしています。そして、ソクラテスとカリクレスという対話者二人ともが、群衆に敵対していることを示しています。

「ソクラテスとカリクレスは二人とも群衆に敵対し、各々、衆愚を支配し、この世からあの世の分不相応な勝利の栄冠を勝ち取ろうとしているのである。」(同書、303頁)

理性や正義を打ち立てる専門知の必要性をソクラテスはのべて、カリクレスを負かすのですが、しかし、二人の対話はともに衆愚を支配しようという意志を持っていることを見抜いて、問題点を次のように指摘します。

「力と理性の劇的な対立の代わりに、三種類の力(あるいは三種類の理性——ただし、今後はいずれも何ら重大なニュアンスを伴わない言葉として)について考えなくてはならない。ソクラテスの力、カリクレスの力、そして民衆の力である。われわれが扱わなければならないのは、二者間の対話(ダイアログ)ではなく、三者間の三角対話(トリログ)なのだ。」(同書、303～4頁)

このような構えを示した後で、二人の対話を、衆愚(第三階級)を排除したものと見做して、その特徴を次のように述べています。

「全員に対する二人の闘い。それは、われわれに、彼らがいなければ万人に対する万人の闘争が生じるだろうと信じ込ませようとする二人組の奇妙な闘いなのだ。」(同書、304頁)

このように評価したあと、続く第8章で、新しい政治の原理を作り出すための方法について次のように述べています。

「原初の＜政治体＞の仮想的イメージを再構築するには、プラトンの否定的な注釈のリストをすべて肯定的に受け取るだけでよい。もともとは集団全体に分配された集団全体に関する知識であったものが少数者の専門知に転換される時、何が失われるのかを逆さまにして示せばよいのである。」(同書、306頁)

この作業の具体化が、最後に置かれている「結論」でなされています。まずそれまでの探求の結果が次のようにまとめられています。

「自然、社会、道徳、そして＜政治体＞の定義は、あらゆる権力の中で最も強力で、最も逆説に満ちたもの——政治を消滅させる政治、非人間へ墮落することから人間を守る非人間的な自然法則——を創造するために、すべて一緒に生み出されたのだから。」(同書、383頁)

このような判断のもとに、なすべきことは、政治を消滅させるための政治に典型的に示されている政治体の原理に代わる原理を打ち立てることだと、ラトゥールは、見えています。

「文化と対峙する客観的な自然とは、人間と非人間の分節化とは完全に異なるものである。もし、非・人間が一つの集合体にまとめられるならば、それは、科学によって非・人間と同じ運命を分かち合うようになった人間と同一の制度のなかの同一の集合体であるだろう。二極の力の源泉——自然と社会——の代わりに、われわれはただ一つの源泉、はっきりと特定可能な人間と非・人間のための政治の源泉、集合体の中へと社会化された新しい存在のための源泉があるだろう。」

『集合体』という言葉はついにその意味を見出す。それは、イザベル・スタンジュールが描くコスモポリティクスにわれわれすべてを集めるものなのだ。隠れた確実な力(自然)と疑わしくさげすまれた力(政治)という二つの力の代わりに、われわれは同じ集合体の中で二つの異なった課題を有するだろう。第一の課題は、『どれだけ多くの人間と非・人間が考慮されているか』という問題に答えることであり、第二の課題は、ありとあらゆる問題の中で最も難しい問題、『犠牲となるものの対価を払ったうえで、あなたは善き人生と一緒に歩む準備ができているか』に答えることである。この最も高度に政治的かつ道徳的な問題が、何世紀にもわたって、多種の聡明な人々によって、人間をつくりあげている非・人間を抜きにして人間だけのために提起されてきたことは、アメリカの建国の父たちが奴隷や女性の参政権を否定したことと同じくらい常軌を逸

していると間もなく見なされるようになることを私は疑っていない。」(同書、389頁)

人間だけでなく、非・人間のことも考慮する新しい政治、コスモポリティックスの実現を掲げた時の問題は、最終的に支配をどうとらえるかに関係しています。

「第四の、より困難な今後の課題の特徴は、支配に関係している。・・・われわれはまだ、支配者を全く持たないということを試みたことはない。無神論は、もしこの言葉で支配に関する一般的な疑いを意味するのだとしたら、将来にわたっても大いに栄えるだろう。アナキズムに関しても同様である。『神も支配者もなく』というアナキズムの麗しいスローガンが、実は常に一人の支配者、すなわち人間というものを想定しているがゆえに不正直なものであったにしても。」(同書、389頁)

支配者を全く持たない、ということについては、2002年に作成され『近代の<物神事実>崇拜』第二部に収録された論文がより具体的に展開しています。最後にそれを見ておきましょう。

3. 政治の転換

ラトゥールの政治的主張の変遷についてはすでに会報296号で指摘しました。それは、「絶対的な自由が一つの神話であるという理由で、疎外されたものを致命的な束縛から解放することを拒む人だろうか。」(『近代の<物神事実>崇拜について』、127～8頁)を支持していた立場の放棄であり、「解放」という概念自体が嗜好性薬物であって、ここからどのようにして自らを解放するか、ということへの転換でした。

それにとどまらず、『科学論の实在』の結論部分を受けて、支配者を全く持たないという、自由についての問いの再提起が、2002年作製の論文でなされています。

「実際、『支配者なしで生きる』という同一の標語は、物神事実の傍らで生きるのか、客体と主体の間で悩まされながら生きるのかによって、全く異なる二つの計画を示すのである。自由とは、支配者なしで生きることだろうか、それとも支配性なしで生きることだろうか。この二つの計画は、することとされるものが似ていないのと同じくらい似ていない。第一の計画は、ある支配者から別の支配者への移行を、結合から離脱への移行と混同することに帰着する。『神も支配者も不要だ』という解放の願望の背後で、悪い支配者をよい支配者に置き換える願望が表現されている。・・・ここでは自由はなおも、ある支配性を別の支配性に切り替えることに存している。しかし、いつになれば我々は、支配性という理想自体を手放すことができるのだろうか。いつになれば我々は、自由の果実を遂に味わい始めるのだろうか。つまり支配者なしで、とくに君主としての私なしで、生き始めるのだろうか。これが第二の計画であり、それは同じ標語に全く異なる意味を与える。別の指揮官の代わりに指揮権を行使することとしての自由と、全く指揮権を持たない生活としての自由が、混同されていた。解放と離脱という理想が袋小路にしてしまった道を、物神事実の力を借りて、自由の表現が再び歩むのだ。つまり自由とは今や、存在を可能にする諸々の繋がりが剥奪されないという権利である。そしてそれらの繋がりは、決定について一切の理想や、無からの創造に関する一切の神学が取り除かれている。・・・少なくともこれが新たな解放の計画であり、それはかつての計画を同じくらい力強く、かつての計画よりはるかに信頼できる。なぜならこの計画は、支配性なしに生きることと結びつきなしで生きることを二度と混同しないように強いるのである。」(『近代の<物神事実>崇拜』、130～2頁)

ここでは、支配者を全く持たないという概念が、支配者なしで生きるということと支配性なしで生きるという二つの概念に整理しなおされ、支配性なしで生きることが目標とされています。

「物神ないし物神崇拜という概念は、まさに、必然性や自由という言葉を用いる人々と、自分たちを存在させている多くの存在によって自分たちが掌握されていることを知っている人々との間の、衝突に由来する。」(同書、133頁)

商品生産が社会の全体を支配するようになり、労働が賃労働に変化していく中で人々は自分たちは自由な人格だと認識するようになり、物神崇拜している人々への批判がなされているのですが、しかし、物神崇拜者だと批判されている側の人々は、人間は自由ではなくてあらゆるつながりの中で生きていくことを知っています。ラトゥールは、コスモポリティックスを考えれば、現在の自由の観念を捨てる必要があると主張しています。

「もし一つの共通の世界の段階的な形成のことを政治と呼ぶのであれば、その世界の一員となることを切望するすべての人々に対して、彼らを存在させている諸々の帰属や結び付きを外部な

いし舞台裏に置いておくことを最初に要求するような、そんな共通の世界というものを想像することがかなり困難であるということは難なく理解されるだろう。」(同書、135頁)

これが、現在の自由論に対するラトゥールの批判です。

「しかし、政治の対象であり、イザベル・ステンゲルスが『世界政治』(コスモポリティック＝人間だけでなくさまざまな非人間を巻き込んだ新たな政治を考えるための概念)と呼ぶものの対象である共通の世界が、グローバル化に類似したものであることを示すものは何もない。すべてのことが示しているのは、逆に、<自然>による因果決定と<至上者>による恣意的裁定という二つの蓄積者では、共通の世界の段階的な形成に関する闘争を終わらせるためには、もはや充分ではないということである。もはや疎外からの解放へと進むのではなく錯綜からさらに錯綜した状態へ進む世界、もはや前近代から近代へ進むのではなく近代から非近代へ進む世界、そのような世界においては、諸決定と諸解放についての伝統的な分配は、『グローバル化』を定義するのにはもはや何の役にも立たない。『グローバル化』の困難に対しては、いまのところ、政治的悟性では太刀打ちできないのである。マファルダの父親の機械的な反応にも拘らず、もはや偶像を粉々にして隷属状態から自由へと急激に移行することが重要なのではなく、もろもろの結び付きそれ自体の中に救うものと殺すものとを引き込むことが重要なのである。」(同書、136頁)

このような政治観のもとに、2017年に『地球に降り立つ』が書かれました。そこでの新しい政治の提案がどのような思索のもとで形成されたのか、それを追ってみました。改めて、商品を中心として分析するという、ラトゥールに欠けている課題についての研究が問われていると実感しています。

新型コロナ後の知とは

——ラトゥールの政治思想に学ぶ——

『季報唯物論研究』寄稿論文

はじめに

気候変動への対応が、グreta・トゥーンベリの行動により全世界化した。この間異常気象の数々が全世界を襲っていた。世界経済は、一〇年以上続いている株のバブルの崩壊局面が予想されていた。中国がデジタル経済化で蛙飛びでアメリカを追い越そうとし、米中新冷戦が開始されようとしている。ヘッドライン的に述べたこのような世界に、突然新型コロナのパンデミックが始まり、世界は一〇か月間その対応に追われている。

コロナ禍で見えてきたものは、デジタル経済の急速な発展であり、スマートシティ構想などで計画されていたデジタル化が前倒しで進んでいる。リモートワークの増大、配送現場での各種のロボットの導入などがある。他方で、従来金銭で決済することで見えてはなかった人々の社会関係が見えるようになり、エッセンシャル・ワーカーズなしに社会は存続しないという事実が浮かび上がってきている。自粛生活で考える時間を取り戻した人々の反省も、SNSの発達で、共有されるようになってきており、社会運動の存在様式を大きく変えていっている。とはいえ、コロナ禍以前から全人類の問題となっていた気候変動と人口問題は依然として解決の見通しは立てられていない。このような時代は、知のあり方を問うことから思考してはどうだろうか。

私は次に述べるように、今年に入ってラトゥールの研究にのめりこんでいた。彼の仕事が、私が前世紀末に提案した文化知と双生児であると直感したからだ。私はマルクスの商品の分析に学んで、関係を解明することのできる新たな知の形態として、科学知を乗り越えた文化知を素描した。他方、ラトゥールは、近代という社会的意識形態の虚偽性を暴く仕事をしてきた。ちょうど背中合わせの仕事だったのだ。双方を接合することが私の当面の課題であり、今回の寄稿もその一環である。

一 ラトゥール研究の経過

私は、一九九〇年代末に、友人たちと当時問題となっていた地球環境の保全に向けた研究会を組織し、その成果を『社会システム研究』にまとめたことがある。そして二〇〇〇

年には、当時発足したばかりのアソシエ 21 の場に、「二一世紀の協同組合運動の課題」（論文①）を提起した。この文書の前半は地球環境と人類の活動とのかかわりを具体的に解明し、人間圏での循環が資本の循環としてなされていることを環境破壊の原因と見做して、資本の活動を制限していく方策の一つである協同組合運動が直面している課題を掲げたものだった。

私はこの二〇年間、この協同組合運動の課題を自分の活動の指針としてきたが、リーマンショックの前まではそれなりに運動の進展はあったものの以降は壁に突き当たっていた。また、思想的には、科学知の批判とそれを乗り越える文化知（関係を把握する新たな思考）を提案してきたが、これは活動家の世界でも一般化できずにいた。

今年に入って、ブルーノ・ラトゥールの『社会的なものを組み直す』（法政大学出版局）を読み、社会学者は現代社会をも人類学的視点で研究すべきであり、その肝は現実に社会のなかで活動しているアクター（人間だけでなく、それと関係している非人間）のネットワークを参与観察すべきという提案に賛同し、たくさん翻訳されている彼の諸著書を読み始めた。ちょうど非常事態宣言が出され、自粛生活が要請された四月に『地球に降り立つ』（新評論）を読み、この書での「新しい政治」という提起に賛同して、各方面に、彼が構想しているテレストリアルの詳細な調査にもとづく新しい政治を創り出すことを呼びかけてきた（論文②・③・④）。

そして、『虚構の「近代」』（新評論）で提起されている近代の社会的意識形態の虚構性への批判を、新しい知のあり方と捉えて、その構想を報告したりもしてきた（論文⑤）。さらには、『近代の〈物神事実〉崇拜について』での「物神事実」という提案が、『虚構の「近代」』で使われていた「ハイブリッド」という用語の改定であることを理解し、その観点からこの書の紹介を試みた（論文⑥）。そして、ここで扱われているのが人々の信仰への批判的検討であって、物神性という商品のを念頭においてしまうのだが、商品が論じられてはいないことについて、なぜそうなのかについて文章化しようとして、現在作成中である。これが背中合わせの仕事を接合する試みである。

このようにまだ研究途上であるが、今回はテーマを政治思想に絞って、ラトゥールの提起を整理してみたい。

（注）

（一）私の研究論文目録

- ① 「二一世紀の協同組合運動の課題」は改題し、「環境危機と二一世紀の協同組合運動の課題」として、文化知普及協会サイト「研究報告」参照。
- ② 「ラトゥールの『地球に降り立つ』の勧め」文化知普及協会サイトトップページ参照。
- ③ 「新型コロナ後の世界を考える」同サイト、トップページ参照。
- ④ 「新型コロナ後の世界に向けた思考——ラトゥール『地球に降り立つ』の解説」同サイト、トップページ参照。
- ⑤ 「気候変動に対応できる政治を求めて」同サイト、「研究報告」参照。
- ⑥ 「ラトゥール『近代の〈物神事実〉崇拜について』の解説」同サイト、「研究報告」参照。

（二）ラトゥールの紹介と邦語文献一覧

① ラトゥールの紹介

アクターネットワーク理論（ANT）の提唱者

比較人類学者を自称、サイエンススタディーズから、一九八九年の転機（ベルリンの壁崩壊と、気候変動に対応すべく国際会議の発足）を踏まえて、新しい社会の創造に向けた提言を始める。一九九九年ころには政治に対する見解の転回があり、『地球に降り立つ』で、新しい政治を提案した。

一九四七年生まれ、フランス人、フランス語では、ブリュノ・ラトゥールであるが、フ

ランス語と英語の双方で本を出版していて、英語読みではブルーノ・ラトゥールとなる。

② 翻訳書一覧

1985年『細菌と戦うパストゥール』（偕成社、1988年）訳書はフランス語版による

1987年『科学がつくられているとき』（産業図書、1999年）訳書は英語版による

1991年『虚構の「近代」』（新評論、2008年）訳書は英語版による

1999年『科学論の实在』（産業図書、2007年）訳書は英語版による

2002年『法が作られているとき』（水声社、2017年）訳書は英語版による

2005年『社会的なものを組み直す』（法政大学出版局、2019年1月）訳書は英語版による

2009年『近代の〈物神事実〉崇拝について』（以文社、2017年）訳書はフランス語版による

2017年『地球に降り立つ』（新評論、2019年12月）訳書は英語版による

二 ラトゥールの政治思想の概略

ラトゥールの専攻は哲学であるが、もともと科学的実践を比較人類学の手法で解明する仕事をしてきた。その彼が、一九八九年のベルリンの壁崩壊を経験して、これを社会主義の崩壊として捉えただけでなく、同年に始まった地球環境問題の解決に向けた最初の国際会議の開催に注目して、この事態を資本主義の行き詰まりと捉えた。そしてその原因を近代の社会的意識形態の虚構性と捉えて、それに代わる新たな政治思想を提起したのが一九九一年に出された『虚構の「近代」』だった。おそらくラトゥールが政治思想について問題提起をしたのはこれが最初だと思われる。

このときの提案は「モノの議会」であった。この時点では代理制（議会制）を肯定していた。しかし一九九〇年代末に発表した『近代の〈物神事実〉崇拝について』に収められた諸論文や一九九九年に出版された『科学論の实在』で代理制に代わる政治思想を展開し始め、従来の共産主義の理想であった「支配者なしで生きる」ということに対して「支配性なしで生きる」という立場を提起するようになる。前者は今現在の支配者を打倒しようという立場であるが、その場合新たな支配者を必然的に生むのであり、そうならない保証として「支配性なしで生きる」という新たな立場を据えたのだった。そしてこの発想の延長に『地球に降り立つ』での「新しい政治」という提起がなされているのである。

このような経緯を見るときに、そもそもの発端での問題提起についてここで紹介したい。それは『虚構の「近代」』で展開されている、近代の社会的意識形態を「憲法」としてまとめ、これに代わる新しい憲法を制定する作業である。この新しい憲法の最初の実践例としてそのときには「モノの議会」が提案されているのである。

三 ラトゥールの近代憲法とは

ラトゥールの試みは、近代という社会的意識形態にあっては、社会と自然を区別しそれぞれについての決まりごとはあるが、その中間にある「ハイブリッド」についての認識が欠落している、という現実に対して、社会と自然とのつながりをつけることによって、ハイブリッドについての決まり事を解明しようということだった。

彼はこの書の第一章、危機、では自らがこの書で解明すべき三つの仮説を上げているが、次の第三の仮説が政治思想と関わっている。

「第三の問いは、今日の危機に関するものである。近代が分離〔自然と社会のそれ〕と増殖〔ハイブリッドネットワークのそれ〕という二つの仕事をそれほど効果的にこなすのなら、なぜ今日、私たちは正真正銘の近代人になることを妨げられ、それによって近代自体が弱体化しなければならないのか。近代にならずに、啓蒙主義だけを希求することはできないのか。ここでの私の仮説も前の二つ同様、荒削りである——『ハイブリッドの存在を公式に認めることで怪物の増殖を遅らせ、生産を制御し、発展方向を変えることができる』。これこそ私たちが達成すべき目標だろう。しかしそうすると、現行とは違った民主主義が要求されることになるのか。民主主義はモノにまで拡張しなければならないのか。こ

これらの問いに答えるには、まず前近代、近代、ポストモダンを一から整理し直す必要がある。それによって初めて、今後、維持していく性質と放棄すべき性質を見分けることができるからだ。」(『虚構の「近代」』、28～9頁)

この仮説を解明するために、ラトゥールはこの書の第二章、憲法、では、ホッブズとボイルの論争を取りあげて、近代憲法成立の歴史的過程を思想的に跡付ける。次の第三章、革命、では近代西洋哲学の批判的検討を通じて、カントのコペルニクスの転回をもじった、コペルニクスの反転回を提起し、またヘーゲルの弁証法を批判して、新しい憲法制定のための思想的課題を明らかにしている。第四章、相対主義、では一転してハイブリッドを認識するための方法論を説いている。そして最後の第五章、配分のやり直し、で「新しい憲法」が起草されているのだ。

というわけで、まずはラトゥールの近代憲法についての認識を説明しておくことが問われる。彼は手を変え品を変えて、近代憲法の説明をしているが必ずしも理解し易いものではない。少し長いが、比較的わかりやすい記述を紹介する。それは第三章、近代の四つの作用を繋ぐ、で述べられているものだ。

「第一の作用は自然という外的事実を扱う。私たちは自然の征服者ではない。自然は私たちの外側にあって、私たちの熱情も欲望も取り込まない。もっとも私たちはその自然を動員したり、自然自体を建設することはできる。第二の作用は社会的絆、人間同士を繋ぐもの、私たちを動かす情熱や欲望、社会を形作る擬人化された力を扱う。ここでの社会は、私たちが創造したものであるにもかかわらず、私たちすべてを超越する。第三の作用は表示、意味を扱う。私たちが自分自身に向けて語る物語を構成するアクタント、そのアクタントが生き抜いていく冒険、それを体系立てている比喻や様式を扱う。それらはテキストや言説にすぎないにもかかわらず、私たちをどこまでも支配する大なる物語である。第四の作用は《存在》について語る。《存在》は存在者の中に広く分布していて、存在者やその歴史性と共存するのだが、存在者だけを考えていたのでは必ずといっていいほど忘れてしまう。第四の作用はそうした《存在》を解体する。」(同書、154頁)

第一の作用とは自然科学の領域で、そこでは人間が実験して解明した法則が、人工的なものとは見なされず、普遍的な自然法則とされる一方自然は開発の対象として位置付けられている。これを近代憲法と非近代憲法を対比した図表(後掲)では、第一の保証として「自然は超越的だが動員可能(内在的)」(同書、237頁)とまとめている。

第二の作用は社会の領域でこれは人工物であるにもかかわらず、超越的なものとして機能する。図表では「社会は内在的だが私たちを無限に超越する(超越的)」(同書、237頁)と説明されている。

第三の作用は言説の領域で、図表では「自然と社会は完全に分離される。純化作用と媒介作用とは無関係である」(同書、237頁)と解説されている。

第四の作用は、哲学的、神学的領域で、図表では「なかば抹消された神の徹底的な不在。しかし二つの行政部局の間の仲裁は保証する」(同書、237頁)と説明されているが、二つの行政部局とは社会と自然科学のことである。

以上の予備知識を踏まえて、近代憲法には次の四つの保証があると述べている部分を引用しておこう。

「第一の保証は、自然を社会の織物とは一線を画したものと定義し、それによって自然の超越性を裏付ける。これは自然の秩序と社会の秩序が途切れなく繋がっている前近代の場合とは対照的である。第二の保証は、市民を完全に自由にし、社会を人工的に再構築するよう促す。それは社会の内在性という側面を裏付けており、これも前近代の場合とは対照的である。前近代においては、社会の秩序と自然の秩序は途切れなく繋がっており、一方を変えようとすれば他方も変えざるをえない。つまり近代人の場合、二重の分離が実際面での自然の動員を可能にし、自然の構築を促している。また他方で、分離が社会に安定性、耐久性を与えている。さて第三の保証は、権力の分離を実現し、二つの行政部局を、しっかりと分けられた、水も漏らさぬコンパートメントに押し込める。自然は動員も構築

も可能だが、社会との関係は一切絶たれている。一方、社会は超越的で、対象の媒介によって耐久性を獲得するが、自然との接触はない。つまり、準モノは表向きは追放されている。翻訳のネットワークも覆い隠されているが、これは、純化の働きに対しては対立作用であり続ける。ポストモダン派がこれを完全に排除してしまうまでは、翻訳のネットワークを監視し、追跡することは依然可能だった。第四の保証は、なかば抹消された神に関するものである。神は現前しなければ力を発揮しないが、仲裁作用を提供するという意味で、ここでいう二元論的、アシメトリカル（非対称的）なメカニズムを安定させる効果を持っている。」（同書、234～5頁）

気候変動をもたらすような現代社会の政治的思想的な約束事を近代憲法と措定し、その内容をこのように特徴づけているが、いずれも自然と社会との切断と、四つの領域での独自の保証についての説明である。自然の優越性、市民の自由、自然科学と社会科学という二つの部局への分離、超越的な存在による二つの部局の仲裁、というように整理できる。

四 ラトゥールの新しい憲法

このように述べた後、ラトゥールは、この四つの保証に対応させる形で「新しい憲法」の保証を対比させている。二七八頁に掲載されている対比の図を引用しておく。

この図を念頭に置きながら、ラトゥールの新しい憲法（非近代憲法）の内容について、見ていこう。

近代憲法と非近代憲法(237 頁の図)

近代憲法	非近代憲法
第一保証 自然は超越的だが動員可能（内在的）。	第一保証 社会と自然の共同生産に見られる非分離性。
第二保証 社会は内在的だが私たちに無限に超越する（超越的）。	第二保証 客観的な自然と、自由な社会の生産を継続的に維持。最終分析では、確かに自然の超越性と社会の内在性が存在している。ただし、二つは分離していない。
第三保証 自然と社会は完全に分離される。純化作用と媒介作用とは無関係である。	第三保証 均質な時間の流れに依存することなく、ハイブリッドを再分配する。自由をそうした能力と定義しなおす。
第四保証 なかば抹消された神の徹底的な不在。しかし二つの行政部局のあいだの仲裁は保証する。	第四保証 公のもの、共同体のものとするので、ハイブリッドの生産は拡大民主主義の対象となる。拡大民主主義はハイブリッドの生産を制御し、そのベースを抑える。

「新たな『憲法』草案の第一保証は、準モノ、準主体の分離不可能性といったところだろう。そこでは、共同体の持続的発展や、ハイブリッドを巻き込んでいく共同体の実験を阻害する概念、制度、実践は、すべて危険で有害、あるいは不道徳と見なされるだろう。媒介の仕事が、自然と社会という二つの力の中心軸となる。そうなれば、ネットワークが隠れ家から這い出してくる。さらに中央王国が露になる。存在の破片もなかった第三の領地がいまや全体となるのである。・・・自然を変更しようものなら社会の側にも変更を加え、

両者の調和を図らなければならない。」(同書、234～6頁)

これは第一保証の説明だが、ここでラトゥールが「共同体」と言っているのは人間だけのものではなくて、人間、準モノ、ハイブリッドからなる総体のことである。近代憲法は自然の超越性を認め、それを人間社会から切り離したうえで、利用の対象とみているが、この分離の否定が新憲法の第一の保証なのである。なお、「超越性」と「内在性」という対句は前者が主体の外部にあって操作できないもの、後者は主体が操作可能なものという意味のようだが、実はこれは自然にも社会にも二重に備わっていると見做している。次に第二保証については、次のように述べている。

「自然を作り出す仕事、社会を作り出す仕事は、代理と翻訳という共通の仕事の、後戻りできない手堅い結果から生じている。このプロセスの最後に、私たちが作ったものではない自然と、私たちが自由に変更できる社会が登場する。論争の余地ない科学的事実、自由な市民も、そこに同じように現れる。しかし、それらを非近代の陽射しの中で見ると、近代人が見るのとはまったく違った絵が現れる。つまり、それらとは矛盾を引き起こす見えない実践の、遠く離れた二つの対立する原因として見えてくる代わりに、いまや連続して見える実践の二重の産物として見えてくるのである。だから新草案の第二保証は、近代憲法の最初の二つの保証を分離させない状態で取り組みこととしなければならない。したがってそこでは、自然が客体化(ブラックボックスに取り込むプロセス)し社会が主体化する斬新的過程(操作の自由を獲得する過程)を妨げる概念、制度、実践はすべて有害で危険、一言でいえば非道徳ということになる。」(同書、236～7頁)

自然が客体化し、社会が主体化する斬新的過程を、両者を分離せずに一体のものとして捉える、つまり近代憲法の第一保証と第二保証を組み替えて、自然の超越性と社会の内在性を認めつつも、両者を切り離さない、ということである。その上で第三の保証は次のように説明されている。

「もし私たちの倫理性に必須の分類能力を回復したいなら、『一貫した時間の流れ』が私たちの享受する選択の自由を制限しないように配慮することである。新草案における第三の保証もその他の保証同様大切であり、復古志向か近代化か、ローカルかグローバルか、文化的か普遍的か、自然的か社会的かといった選択とは無関係に、連合を自由に構築するものであるべきだろう。近代の説明では自由は必ず社会の極に位置していたが、非近代の説明ではそれが真ん中の下方領域へと移動する。そして自由の意味は改まり、“社会的技術的なもつれを解いては結合する能力”ということになる。」(同書、238頁)

この説明は唐突なので、図にあった対比に立ち帰ってみる。まず近代憲法第三保証は「自然と社会は完全に分離される。純化作用と媒介作用とは無関係である。」というものである。これに対して、ラトゥールが提案する第三保証は、「均質な時間の流れに依存することなく、ハイブリッドを再分配する。自由をそうした能力と定義しなおす。」というものだ。

ここで「純化」と「媒介」がキーワードになっているが、「純化」とは分析的抽象の領域にある、分断していく働きであり、「媒介」とは関係を取り持つ働きである。ラトゥールは別のところで、現代社会になって初めて現れた技術的製作物だけで現代社会は構成されておらず、過去に開発された諸道具類も使われていることを指摘している。「一貫した時間の流れ」で見ると過去の技術の存在を把握できないかのように考えている。つまりハイブリッドには様々な歴史的時代からなるモノから構成されていると考えて、それを使いこなす能力として「自由」を再定義している。最後の第四の保証に移ろう。

「以前の保証を新たなものに置き換えたならば二重言語は封じられ、共同体の発展は抑制されてしまうのではないだろうか。もっとも、それこそ私たちの望みなのではあるが。減速、緩和、制御こそ、私たち自身の倫理性が期待するものである。これまではハイブリッドの増殖を視野の外に放置してきたが、それを広く承認された管理生産へと切り替えようというわけである。つまり、新草案における第四の保証——おそらくこれが最も重要な保証だろう——は管理生産を担保することである。さて、そろそろ民主主義について語る必要があるだろう。もっともここで問題にするのは、モノにまで拡張された新たな民主主義で

ある。」(同書、238頁)

自然と社会をつながつたものとして捉えることで、技術による自然破壊を政治的な問題として提起し、経済発展の速度を減速させ、制御する。そのための政治制度について、モノにまで拡張された民主主義を考慮する。これが第四の保証である。近代憲法の四つの保証に対比した形で新憲法の概略を述べた後、その効用が次のように示されている。

「人間と非人間は分割され、近代人の対極の前近代人と見なされた多くの民族は近代人と同じことはしないものだと判断されてきた。おそらく、動員量を増やし、ある種のネットワークを延長する必要があったということだろう。だが、いまとなつては人間と非人間の分割は不必要なもの、非道徳的なもの、端的に言えば、新『憲法』に反するものである。とは言っても依然私たちは近代人だったのではないだろうか——これが読者の考えだとしても、もうこれ以上、近代人であり続けることはできない。また、『憲法』を改正しても私たちが科学への信奉を捨てることはないが、客観性、真実、冷厳さ、脱地上性といった性質だけは受け入れるわけにはいかない。結局、科学がそうした性格を表向きに獲得するのは認識論の専断的な回収作業(純化)の後のことだからである。その性質に代えて、科学の最も興味を引く側面を残しておこう。大胆不敵さ、実験法、不確実性、熱心さ、ハイブリッドの不釣り合いな組み合わせ、社会的絆を再構成する驚異的な能力、である。ただ、誕生のミステリーとその秘密主義が民主制にもたらす危険については取り除いておこう。」

(同書、239頁)

新しい憲法でも科学の役割とそれへの信頼は捨てるわけではないが、客観性、真実、冷厳さ、脱地上性は捨て去り、大胆不敵さ、実験法、不確実性、熱心さ、ハイブリッドの不釣り合いな組み合わせ、社会的絆を再構成する驚異的な能力は残す、ということが新憲法の効用である。そして新憲法にもとづくモノの議会の役割については次のようだ。

「すなわち近代憲法の瓦解が間近に迫っていることを示した。瓦解が迫るのは、近代憲法が『社会—自然』のハイブリッド——それを近代人は私たちに残すのだが——を居住させる共通の住処を建造しようとしなからである。代理について二つの問題、二つの部局があるというのではない。あるのは一つの問題、一つの部局である。にもかかわらず、その部局の生産物がまず一緒に吟味され、あとで二つに切り分けられる。……『社会に関わる一切のものを排除しなさい。そうすれば信頼に足る代理制に到達する』。ある人がそう言えば、他の人がこう反撃する。『対象を排除してしまいなさい。そうすれば信頼に足る代理制に到達する』。彼らの論争はすべて、近代憲法によって強制された権力の分割から生じているのである。

いま一度、二種類の代理と、代理人の信頼性をめぐる二重の疑惑について考えてみよう。私たちは結果的にモノの議会を定義することになる。そして共同体の持続性が、その枠内で再定義される。純粋な真実はもはや存在せず、裸の市民もおらず、逆に媒介者が空間全体を占拠している。啓蒙思想は長い年月の末によりやく住処を獲得したのである。自然も存在するが、その名において語ってくれる代理人の科学者とともにある。社会も存在するが、久遠の昔から底荷の役割を果たしてきた対象とともにある。代理人に話をさせてみよう。……すべての代理人は同じ話題を扱っている。彼らが共同して作り出した準モノ、『対象—言説—自然—社会』という連関について語っている。この準モノの真新しい特徴が私たちすべてを驚嘆させる。」(同書、241頁)

ラトゥールは一九九一年にこのような観点からモノの議会を提案した。モノの議会という以上、現在の議会性の枠内での発想だった。この提案は受け止められることなく、気候危機は依然として解決されずに経過してきた。

他方私は、二〇〇〇年に気候危機に対応する協同組合運動の課題についてまとめた。その内容は地球上の物質循環を攪乱するものとして資本の循環を捉え、これを脱資本の運動の形成によって制御しようという提案だった。この運動は広がりを見せてはいるが、政治的発展方向についての政治理論を欠いていた。私はラトゥールの新憲法提案に始まり、以降の新しい政治の提案に至る過程で代理制に代わる政治が提案されていることに注目して

きたが、社会運動の政治的表現を解明するという観点から、ラトゥールの新憲法や新しい政治について学んでいくことが問われていると考えている。その際、ラトゥールの新憲法には資本のことが考慮されていないので、文化知との接合が求められていると考えている。